
LODA

umemomo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LODA

【コード】

N8578X

【作者名】

umemomo

【あらすじ】

『お父さんの夢に生きていくわ』
皇帝の側近である「賢者」を父に持つロダは、ある日何の前触れも無く父の処刑を目の当たりにする。
陰に潜む陰謀と真実を解き明かす為、そして父の夢でもあった賢者になり世界を正す願いを叶える為に、長い長い旅路へと向かうのであった。

灰かぶりの章へ始まりへ（前書き）

R15指定はしませんが、物語の流れ上処刑や自殺などの描写がございます。それほど酷い描写はありませんが、苦手な方はご注意ください。このお話は度々そういつた場面が出てきますが、その度にいちいち報告は致しません。ご了承ください。

灰かぶりの章〜始まり〜

『子供の頃に願う夢は本物なんだよ、信じなさい』

最後に強い意思でそう言い残したおじいちゃんの顔を思い出して胸の奥がギョツとつままれた気分になった。

私の人生は少し変わっている。

まだ10年しか生きていないのに、波乱万丈だと思う。

私をこの世に産んだ顔も知らないお母さんは

『出産後すぐにどこか遠くへ行ってしまったんだ』ってお父さんが言っていた。

本当は（どうして？）って思った時もあったけれど、お父さんはお母さんの事が大好きで、お母さんもお父さんが大好きだったんだって言っていたから別に聞く必要は無いと思った。

二人が愛し合って生まれた私は望まれた子に違いないのだから。それに私はお父さんさえいてくれればそれで良かった。

大好きなお父さん。

なんでも知っていて、生きる為に大切なことを教えてくれて、優しく、穏やかで、大きくて、自慢のお父さん。

お父さんはいつも私に夢を語ってくれた。

「賢者」になつて皇帝を導き、世界を正すんだって。

「世界を正す」ってどういう事なの？って聞いた事があるけれど、お父さんの言っている事は難しく私にはよく分からなかった。ただ「賢者」とは世界で一番偉い皇帝様の傍で皇帝様が間違わないよ

うに見張る人なんだから皇帝様と同じぐらい偉い人なんだよって言うていた。

そんな誰よりも偉い人である『賢者』を目指しているお父さんの娘である事が何よりも誇らしかった。

賢者を目指すお父さんはたくさんのお仕事があるから忙しくて、いつも一緒ってわけにはいかなかったけど、家に居る時はいつも『しりとり遊び』をしてくれた。

物知りなお父さんに勝つのは至難の技でとうとう一度も勝てた事は無かったけれど、一度だけ考え込ませる事ができた時があって、その時は飛び上がるほど嬉しかったんだ。

お父さんと私。

親戚も誰もいないたった二人だけの家族だったけれど、私には何よりも幸せな小さな空間だった。

でも……

お父さんは死んじゃった。

皮肉にもお父さんの夢が叶って、『賢者』になった三日後に、広場でギロチンにかけられて処刑されてしまった。

私は目の前でお父さんの首が飛ぶのを見た。

お父さんの事が大好きで

私の世界のすべてで

私にはお父さんしかいなくて

でも、涙は出なかった。

身体の中の血とあらゆる液体がすべて消滅して
涙さえも出ないほど空っぽになってしまった。

すべてを失った私はまるで紙のようにぺらぺらになった気分で家に
帰った。

誰もいない筈のその家に知らない人が立っていた。

背がすらっと高くてひげの生やした見知らぬその老人は眉間に濃い
しわを寄せながら『ここにいたら危険だから遠いところへ連れて行
く』とそう言っただけの手を少し強引に引っ張っていった。

一瞬怖かったけど、何故だか私にはその人が悪い人には思えなくて
黙ってついて行った。

その人は自分の事を「おじいちゃん」と呼びなさいって言った。

だからそう呼ぶようにしたけれど、『おじいちゃんは私のお祖父ち
やんなの？』って聞いたら

『それは、違う』って返事が返ってきた。

おじいちゃんは私を大事にしてくれたけど、決してお父さんのよう
に私を愛してはくれなかった。

私の訊ねる事にはなんでも丁寧に応えてくれたけど、お父さんが何
故処刑されたのかは絶対に教えてくれなかった。

あと、おじいちゃんが誰なのかも。

顔は怖いし、笑わないし、褒めてくれないし、一緒に遊んでもくれ
ないけど、私の知らない事にいつも必ず答えを返してくれる・・・
そんな所がお父さんと似ていたから私はこの世でお父さんの次にお
じいちゃんを信用する事にした。

それにおじいちゃんは私の夢を否定しなかった。

『お父さんのように立派な賢者になるの』

そう言ったら、困った顔はしたけれど『やめなさい』とは言わな
かった。

お父さんが死んでから私の中に残ったのはお父さんの夢だけだったからそれが嬉しかった。

私はいつもおじいちゃんの前では緊張してしまっただけ上手く笑ったり話したりできなかつたけど、本当はおじいちゃんの事が少し好きだった。

ただ、好きになって良いのか分からなかつただけなんだ。

そのおじいちゃんも今は地面の下で眠っていて、生きていた証はこんな小さな冷たい石一つになっちゃった。

おじいちゃんは原因不明の病気で死んだ。

でも私は知っている。

この世に「原因不明」なんてものは無いんだって事を。

世界が広すぎて人は理解しきれないから「不明」と言い訳を作るだけで、この世のすべては原因があつて事象が成り立っているんだつてお父さんが言っていたから。

私はおじいちゃんの病気の原因を調べる事にした。
諦めずに徹底的に。

お父さん。

お父さんの言つた通り、原因はちゃんとあつたよ。

でも、原因つて知りたくない時もあるんだね。

おじいちゃんの死因は慢性的な毒草の摂取による中毒死だった。

最初はいつも私とおじいちゃんを煙たがっていたお婆さんの仕業かと思つた。

お婆さんは大嫌いな私を連れてきたおじいちゃんの事が嫌いだったから。

お父さんが死んだ次の日、私はおじいちゃんに田舎の小さな農村のボロ屋に連れてこられた。

そこには家族がいた。

『息子夫婦と孫』とおじいちゃんは言った。

生活は苦しかった。

厄介者である私を連れてきたおじいちゃんをおばさんは毎日怒鳴っていた。

私もいつもおばさんに箒で叩かれたり、ざるを投げられたり、酷い時には頭にぶつかつたら死んでしまうような重たい陶器も身体にぶつけられた。

おばさんはいつも物を投げるだけで決して手では私をぶたない。そこにはかすかな情さえも無かった。

でも、おばさんにとって私は厄介者の憎き赤の他人だったけれど、おじいちゃんはおくまで夫の父親で疎ましくても家族だった。

毎日愚痴を言っていて、イライラをぶつけていても命を奪うような事はしなかった。

おじいちゃんは自分で毒草を食事に混ぜて摂取していた。

それが分かったのは、おじいちゃんが持病の薬と言って食事に混ぜていた薬そのものが毒草だと知ったからだ。

それは計画的な自殺行為だった。

おばさんは私に言った。

「一人増えたあなたの食いぶちを作る為にこの人は死んだんだ。お前が殺したんだ。すべての原因はお前なんだ」……と。

最初私は辛かった。

おばさんの言う事が本当ならおじいちゃんは私のせいで死んだのだ。でも、毎日毎日おばさんに同じ罵倒をあびせられているうちに私の

中には一つの疑問が生まれた。

すべての原因

おばさんはそう言った。

「すべて」ってどういう事だろう？

おじいちゃんが死んだのは私の責任……

それだけならすべてとは言わない。

すべてというからには1つ以上の事の筈だ。

その時気がついた。

私は何も知らないんだってという事を。

お父さんはなんで処刑されたの？

なんでおじいちゃんは私を帝都から連れ出したの？

おじいちゃんは誰？

どうして最後に私の夢を肯定するような言葉を残したの？

まるで遺言のように。

信じなさいって何を信じるの？

それらの謎が、すべての原因に繋がっているような気がした。

「おじいちゃん、私行かなくちゃ。お父さんも待っているわ……」

両手で握りこぶしを作って、歩きだす決心をした。

お父さん

おじいちゃん

私、必ず真実を明かしてみせるわ

だって私はお父さんのような賢者になるんだもの

賢者は賢くなくちゃいけないから知らない事が一つとしてあっては
いけないんだもの

すべてを知って頂点に立たなくちゃいけないんだもの

「私はお父さんの夢に生きていくわ!」

空に投げかける言葉。

信じなさいと言ったおじいちゃんに返す言葉でもあった。

空高く、宇宙の果てに居るお父さんとおじいちゃんにこの決意が届
きますように。

灰かぶりの章〜マフタの森へ〜(1)

私の家族はお父さんだけだ。

おじいちゃんの事は好きだったけど家族とは違う。

ましてやおばさんやおじさんは私にとっては赤の他人で、向こうも私の事が大嫌いだから

家を出ても何の反応も無いか喜んで追い出すんだと思っていた。

だから・・・

私の行動を静止させるかのように手を掴んだおばさんの行動は意外だった。

「なっ・・・何を言っているんだい！？この子は！子供が一人で外で生きていけるわけがないだろう！」

ほとんど骨と皮しかない手にはおばさんの握力が妙に強く感じた。

ギリギリと痛むけど、不思議と熱は感じなかった。

「おばさん、さようなら。」

私はすべての力を振り絞ってその手を振りほどき、相手を見る事も無くそのまま外の世界へと繋がる扉に向かう。

「お父さんが待っているのよ。私、行かなくちゃ・・・」

もう、ここには用は無い。

背後でおばさんが「恩知らず」とか「気がおかしくなったんだ」とか「病気だ」とかいろいろ言っていたけど、煩わしかった筈のキンキンと響くその声も今の私にはもう何も届かないし関係無い。

私は外の世界へ行くんだ。
お父さんに守られていた幸せな空間でもなく、地獄の毎日をおくつたこのボロ屋でもない……
これから向かう世界はきつと今までに見た事も無いほど広くて恐ろしい所。
そこには答えがある。
だから私は行くの。

「ロダ、待ちなさい。」

未練も無い家を後にして数メートル歩いた時だった。
知っているけれど、ほとんどしゃべらない人だったから一瞬誰だか分からなかった。

「おじさん……」

私は振り向かなかつたけど小走りで前に立ちふさがるとおじさんは視線を合わす為にしゃがみ込んできた。
私はこの時初めてまともにおじさんの顔を見た気がした。
ぼさぼさの髪の毛の間から除く蒼みがかかった瞳は以外にも真摯な光を宿していた。
おじさんはほとんどしゃべらない人で、おじいちゃんとおばさんが言いあつていても何も言わず、私がおばさんに物を投げられていても見て見ぬフリをしていた。
まるで死んだように身を潜めて生きていたおじさん。
おじさんの生きている証をその瞳に初めて見た気がした。

「帝都に帰るつもりかい？」

静かな揺れの無い声。
少しおじいちゃんに似ていた。

「うん。私考えたのよ。お父さんを処刑したのは皇帝様でしょ？だから皇帝様に聞かなくの。どうしてお父さんを処刑したのだった？そしたら真実が分かるもの。」

「帝都は遠い・・・道も分からないだろうに・・・」

おじさんは私を引きとめようとしているのだろうか？

それは変だ、理由がない。

私の事なんて大嫌いの筈なのに。

「帝都はここから北の方角だっておじいちゃんが言っていたの。」

私はそう言って、前におじいちゃんが指差した方に手を伸ばした。

「太陽は東から昇るから、午前は太陽を右側に見て歩いて、沈むころは夕日を左側に見ればいいのよ。曇っている日は困るけど・・・でもお父さんが言っていたの。世界は丸くて果てが無いから歩いていけば必ずどこかに辿り着くって。きつと間違っていたらここに帰ってきてしまうから、その時は一からやり直せばいいのよ。」

おじさんは少し複雑な顔をした。

眉はしかめているのに、微かに口元が笑っている。

その表情の意味は私には分からなかったけれど、まるで私の後ろに誰かを見ているかのようだった。

「ロダ、最後におじさんに聞きたい事は無いかい？」

唐突におじさんはそう切り出す。

そういえばおじさんは帝都で働いていた事があるんだっておじいちゃんと言っていた気がする。

もしかしてお父さんの事を何か知っているのかもしれない。

「おじさん……」

私は思わず開いた口を両手で勢いよく押さえ込んで言葉を飲み込んだ。

おじさんはそんな私の態度を訝いぶかしげに見てくる。

「お父さんがね、本当に知りたい事は人から聞いちゃいけないんだって言っていたの。だから私はおじさんに何も聞かない。おじさんに聞く事は何も無いわ。自分でちゃんと答えを探すから大丈夫。」

「そうか……」

私に何を期待していたのかは分からないけれど、おじさんは少し残念そうな顔をした。

可愛そうなおじさん。

弱すぎて何もできなかったおじさん。

でもきつとこの人は悪い人ではないんだろう。

こうやって話をする私の事を少し心配してくれているのが分かるもの。

でも、おじさんは私にとってこれから進んでいく道に必要ではない人……

だから……

「おじさん、さようなら」

もう二度と合う事は無いと感じながらもう一度おじさんの瞳を見る。

（おじさんの事は好きにはなれなかったけど、瞳は少し好きだわ）

そう心で呟きながら、もう何も言っていないおじさんの横を私は通り過ぎていった。

灰かぶりの章〜マフタの森へ〜(2)

おじいちゃんが指差した方向には帝都への道を遮る大きな難関があった。

通称「マフタの森」と言う。

「マフタ」とは森という意味だから直訳すると「森の森」とおかしな言葉になるのだが

意味としては「森の中の森」という事で、いかに抜けるのに困難な森かという事を表している。

おじいちゃんと同じくここに来る時は、半日で森を抜ける事が出来た。

それはあらかじめ抜け道を知っていたのと、おじいちゃんが魔法使いだったからできた事だ。

そう、マフタの森は魔法のかけられた迷いの森でもあるのだ。

面積はそんなに大きく無いのに、人がよく迷うのはこの魔法による幻覚が原因なんだっておじいちゃんは教えてくれた。

だから魔法使い以外はここを通れないんだよ・・・とも。

私は魔法使いでは無い。

そもそも魔法使いとは具体的にどういう人間なのかは分からない。

おじいちゃんも見た目は普通だったし、森の中を一緒に歩いていた時も何か特別な事をしていたとは思えない。

1年近くおじいちゃんと一緒に居たけれど、いきなり手から火の玉が出るとか、空を飛ぶとか、無いものを出現させるとか、そんな非現実な事をしている所なんて見た事が無い。

本で魔法使いの事は読んだ事があるけれど、どれも大昔の文献で伝説みたいなものだから遠い昔話の登場人物ぐらいにしか思えなかった。

「うん・・・困ったわ。」

森の入口を睨みつけながら私は地面に食い込んだ適当な大きさの石に腰を下ろした。

分かっていた事だけれど、いきなり道をふさがれた気分だった。

このまま思い切って森に入っちゃおうか・・・

でも、おじいちゃんは私に嘘を言った事は無い。

きっと魔法使いではない私はただ闇雲ではこの森をこえる事はできないのだ。

「こつという時はどうすれば良いんだっけ？」

私は、お父さんが教えてくれたあらゆる事の中から適切な言葉を見つけ出そうと思案する。

けれど、お父さんはいろんな事を教えてくれたけど、魔法の事は何も教えてくれなかった。

『魔法ってなあに？』って聞いた事はあるけれど、『ロダはまだ知らなくていいんだよ』って言われた。

なんでも応えてくれるお父さんなのに、何故か魔法の事はいつもはぐらかされた。

だから、私は魔法に関してはからっきしなのだ。

「ンナアゴ~~~~」

本気で悩む私の前を気の抜けた泣き声で通り過ぎる一つの物体。

灰色の長い毛に睨みつけたような細い目。

この食糧難の時代をあざ笑うかのようなお腹の垂れたプヨプヨの身体。

「なんだ、ネコ。お前も付いてきたの？」

いつからか、自分の周りになんとなく居付いた猫。

可愛く甘えたりしないし、なけなしの私の食料を横取りするし、鳴き声はだみ声で可愛くないし、いつもおちよくなるように私の周りをチヨロチヨロする憎たらしい猫だったけど、なんとなく近い存在に感じていた。家族とは少し違うけど、同士とか仲間とかそういう感じだ。

「ねえ、ネコ。行き詰った時はいつもお父さんの言葉を思い出すの。でもお父さんの言葉の中に答えが無い時はどうしたら良いの？」

『そんなの知るか・・・』

そう言わんばかりに猫はいかにもわざとらしく大きなあくびを一つする。

「そうよね。お前に聞いたって仕方無いわよね・・・」

自嘲気味にそう呟くが、西側の空に日が沈みだしている事に焦りが出る。

このままここで立ち往生してもどうしようもない。

後戻りは選択肢には無い。

となると前に進むしかない。

私の結論はここに出た。

「そうよ。おじいちゃんだって何か特別な事をしていたわけじゃ無

いんだもの。きつと魔法使いじゃなくても大丈夫。知恵を使つて乗り越えられない事は無いってお父さんも言っていたじゃない。」

まるで自分を励ますかのようにそう言い聞かせるが、夕暮れと共に更に闇が濃くなっている森の様子に恐怖が襲いかかる。

天まで昇る木々はまるで怪物のような黒い影を落とす、さわさわと風になびく音は化け物のせせら笑いに聞こえてくる。

それでも私は前に進むしかなかった。

すでに背後には何も無く、目の前には困難な道しか無いけれど何も無い所は通れないが、険しい道は進み続ければ乗り越える事ができるのだ。

そうして、私はマフタの森へと踏み込んだ。

そこが大魔術師のかけた魔法の森だとも知らずに……………

灰かぶりの章／鬼と鬼ごっこ（1）

マフタの森へ入ったその瞬間、（しまった！！）と思った。それは一瞬で分かった。前に来た時とは全然違う。まず景色が違う。

鬱蒼とした薄暗い木々の風景は一見同じように思うが、道が無い。おじいちゃんと来た時はケモノ道ではあったが、ちゃんと人が通った形跡のようなものは残されていて、そこを辿っていけば自然と外へ出られたのだ。

地面は湿った苔とシダに覆われていて、無造作に伸びた草が足に絡みつき、前進するのを拒む。

それに追い打ちをかけるように、怖いぐらいの静寂が妙な感覚をおそった。

本来、森というのは生命の家である。

例えどんなに静かな森でも何らしかの生き物の生活音がするはずだ。

例えば鳥や虫の声。

例えば川のせせらぎ音。

例えば風に揺れる木々の葉の音。

今は闇が濃く広がるだけで、まるで生命の気配がしない。

（やっぱりここは魔法の森だったんだ・・・）

早速、後悔が襲ってくる。

おじいちゃんが言った事は正しかったのだ。

でも今更どうしようも無く、ただひたすら道無き所を前進するしかないのだ。

地面を踏みしめる音だけが唯一、自分の存在を表しているかのようだった。

不安で

不安で

大声で泣きたい気分だ

今、私は本当にひとりぼっちなんだ……

「ナゴオ〜」

いつの間にか足取りが止まっていた事に気がついたのは、ひどい猫の声で我に返った時だった。

相変わらず足元は背の高いシダで視界が遮られていたけれど、数メートル先に猫がいる事は不思議とはつきり分かった。

「ネコっ!!」

急に薄れる恐怖。

思わず走り出してしまふ。

猫はそんな私から逃げるように更に前へ前へと進む。

それはまるで、いつもの日常のようだった。

猫はいつも私に悪戯をする。

その度に私は箒を片手に猫を追いかけてまわしたものだ。

あの巨体に似合わず、すばしっこい猫にいつも最後は逃げられてしまっていたのだが、今回はただ私をおちよくっているというわけでは無さそうだ。

まるで道を知っているかのように森の奥深くへと入っていく。

(道案内をしてきているのかしら?)

不思議とそう思ったから、ただひたすら猫を見失わないように必死に追いかけた。

どれくらい走っていただろう?

唐突に意識を呼び覚まされたかと思うと、景色は一変していた。

夜が明け朝が来たのだろうか?

さっきまではただの闇深い森だったのに、天から光の筋が流れ込み点々と笹の群生地に灯りをともしている。

さわさわさわ・・・・・・

頬に撫でるような風を感じ、際の髪が揺れ上がって一瞬それらが視界を遮るが、すぐに開けた。
しかし、その景色の中には今までとは明らかに違うモノがはつきりと主張していた。

初めは幻かと思った。

黄金のように輝く黄緑色の髪。

先端が広がった袖の長い藍色の着物。

その背中は華奢だが、差し込む光にスポットライトをあてられたその少年からは神々しいまでの威厳を感じた。

「あなたは、だあれ？」

現実離れたその光景に、夢うつつの気分ですら発する。

私の声に応えるかのように少年は演出かかった動きで、ゆっくりと振り向いた。

「きゃっ！！！！！」

私は腹の底から出た、短く甲高い悲鳴をあげならその場を思わず飛び上がると、反射的に背後の木の陰に隠れた。

振り向いた少年の顔は人間のものでは無かった。

額に突き出た二本の角、真ん中に主張する大きなだんごっ鼻、威嚇するように大きく開けた牙のはみ出た口。

目の瞳孔は開いていて、分厚いまぶたは、怒っているようにも見えないし、困っているような泣いているようにも見えない。

それは鬼の形相そのものだった。

「お前、皇帝に会いたいのか？」

その声は鬼からではなく、その裏にかくれた場所から発せられた。

おおよそ鬼らしくは無い、甲高い少年のものだった。

どうやら、鬼の正体はただのお面らしい。

よくよく見ると、耳のあたりにその証拠としてお面を固定する紐のようなものが見える。

それが被り物である証拠だった。

少し安著した気分で、私はひよっこりと顔をだして、それでもまだ少し恐怖を残しながら、たどたどしく会話する。

「皇帝様を知っているの？」

「ああ、よく知っているぞ、会わせてやるつか？」

「本当っ！？」

思わず反射的に感嘆の声をあげる。
素直に言葉が出てしまった。

「だが、木に隠れて怯えているような弱虫には教えてやらない。もつと近くに寄れ。」

鬼の少年は命令するかの口調でそう言った。
背格好からすると、自分とそんなに年齢は変わらない筈なのにどこか偉そうだ。

歳というよりは育った環境の違いによるものかもしれない。
私はおずおずと木から出て、なるべく鬼の顔を見ないようにしながらじりじりと少年との間合いを詰める。正体が人間と分かっているも、怖いものは怖いのだ。

「びくびくするな、もっと近くだ！」

そんな私の行動にイラついたのか、少年は怒ったような声をだす。
そのもの言いに不快感を覚えるけど、今は大人しく従う事にした。
できるだけ地面に視線を落としていたせいか、いつの間にか目の前の視界には少年の着物が間近に迫っていた。
思ったより近かったその距離に思わず視線を上げると、視界いっぱいには開かれた五本の指が広がった。
かと思うと、一瞬にして目の前が赤く染まる。

ボンッ！！！！

火花が散ったかと思うと、全身を流れる血の中に酸っぱく冷たいものが走ったような気がした。
すぐに熱が頭を襲い、顔を覆う様にして両手を目の前にかざす。

「キヤハハハハハハハハ、バ〜カ」

頭上で人を馬鹿にした少年の笑い声が響いた時には私は腰を抜かして地面に尻もちをついていた。

一瞬なにが起こったのか分からなかったが、すぐに脳が状況判断の分析をはじめめる。

確かに火の玉が見えた。

それも少年の手から発生するのを。

人の中から火の玉が出たりする筈がない。

そうは分かっているも……

(そうだ、ここは魔法の森だったんだ。常識は通じない。)

微かに焦げた前髪のきな臭さを感じながら、マフタの森は幻を見せる所だという事を思い出した。

「お前、面白そうだから特別に鬼ごっこで勝負をしてやる！」

鬼の少年はどこか嬉しそうに笑いをこらえながら身軽に一步後ろへと飛びのき、ウサギのようにびよんぴよんと跳ねあがりながら小高い丘の上へと上っていった。

そのまま、行ってしまふのかと思ったがそうでは無く、まるで私を誘う様に顔だけ振り向くと少し声のトーンを上げて言った。

「俺を捕まえられたら、望みをかなえてやるよ。ゲームスタートだ！」

灰かぶりの章〜鬼と鬼ごっこ〜(2)

お父さん

ロダは今、魔法の森で鬼さんと鬼ごっこをしています。

勝負に勝ったら皇帝様に会わせてくれるんだって。

私は皇帝様に「どうしてお父さんを処刑したのか？」を聞かなくちゃいけないから、なんとしても勝たなくちゃいけないの。
きつと勝ってみせるわ！お父さん。

(痛っ！)

もう何度目の感覚だろうか。

草むらには無数のトゲや刃物のようにスパツと切るナイフのような硬い葉が隠れている。

それらは容赦なく私の手足に襲いかかって切り傷を刻んでいった。

だが、いちいちそれに反応しているわけにもいかない。

鬼の少年は、道を塞ぐ木々の間をすり抜けるように軽々と進み、距離は広がるばかりで今にも見失いそうなのだ。

心臓は爆発しそうで息苦しさは思考能力を低下する。

そのせいか、次第に視界も狭まり、私の目には小さく点滅する鬼の姿しか見えなくなっている。

頭の中には命令を出す場所があつて、そこがすべての行動をつかさどっているんだ。

だから、何かをし続けなければならない時はその行動をずっと頭の中で叫び続けて、指令を止めてはいけないよ。

お父さんはそう言っていた。
だから私は何度も叫ぶ。

走れ！
走れ！
走れ！
立ち止まるな！！
走り続ける！！

指令は脳を伝い私の身体を動かし続けるけれど、次第にぬかるみだす地面は足場を悪くして進行を拒む。
踏みしめる度にぐちゃっと沈み込む感覚が体力を奪っていき、どんどん広がる距離感に心も萎えてくる。

（苦しい、もう走りたくない・・・）

一瞬よぎった弱気な心。

それ々に呼応するかのようにはズボッと音が響き、足だけでは無く身体全体が地底に沈み込む。

おおよそ泥を踏みしめた程度の沈み方では無かった。
まるで地面が抜け落ちたかのように足場の感覚を失う。

「しぎやっあ！！」

帰路を促す歌を唄う漆黒の魔女の鳥。

帰りたいと誘うのは親鳥？

それとも子鳥？

(私もお父さんの元へ還る事ができたらどんなに良いか……)

それが無理だと分かっているから、むげんそう夢想はおしまい。

再び現実で歩み始める為に、かたく結ばれた瞳をこじ開ける。

空は虚しいぐらいに開けていた。

さっきまで天を覆っていた鬱蒼としたものは無くなり、ミルクオレ
ンジの空が広大に広がっている。

少し歩いてみると、胸のあたりまで伸びたススキから微かに白い綿
毛が舞い上がった。

「鬼さんはどこ？」

一面に広がるススキが遮って思う様に身動きできない。

でも、空だけは開けていて、きつと鬼の少年の元へも続いている。
意を決して「すうう」っと大きく息を吸い込んだ。

「鬼さあ〜ん、鬼さん！あなたはど〜〜〜こ????」

視界のギリギリ端、斜め右後方。

ガサガサッと音を立ててススキが動いた。

隠れた獲物のように姿なく動くそのシルエットを追って、進行方向
を見定める。

あざ笑うかのようにジグザグに進んだターゲットは、わざとなのか
私がつぎに追いつける距離でその動きを止めた。

息を潜める。

忍び足を決め込むが、動くたびにススキは揺れて音を奏でるからほとんど意味がない。

でも、こういうのは気持ちの問題なのだ。

「捕まえたっ！！！」

わざとらしく、両手で薄くなったススキの向こうの影を掴み取る。その瞬間！

何も無い空中に青い火の玉がぼこぼこ数個浮かび上がった。

（危険！）

私は思った。

ゴオゴオと燃える赤い炎より、シンシンと燃える青い炎の方が恐ろしいんだと知っているから。

それは一瞬にして服に燃え移り、全身を包むと赤い炎となって私を燃やしつくす。

熱いと声を出す事もできずに踊り狂った視界の先には救いのブルーが見える。

考える間もなく一直線にそれに向かった。

灰かぶりの章〜鬼と鬼ごっこ〜 (3)

ばしゃんっ

それは思ったよりずっと浅くて腰までも無かったから、炎を消すためには不恰好に水底に横たわるしかなかった。

水と火は天敵同士。

でも、天敵がいるからこそお互いより強い力を発揮できるんだよ。すべてを焼き尽くしてしまう前に水が冷ましてくれるって火は知っているし

すべてが水没してしまう前に火が蒸発してくれるって水は知っているからね。

それは自然も人間も同じ、バランスを保つことによって世界は保っているんだ。

だから、ロダ。

正しくて賢い者がこの世に存在するならば愚かで疎い人間も必要だという事なんだ。

それを忘れちゃいけない・・・

賢者を目指すならそれを忘れちゃいけないよ。

処刑される少し前にそんな事を言っていたお父さん。
どうして？

愚かな人間なんて必要無いだろうに。

お父さんを処刑した悪い皇帝様なんていらぬのに。
分からないよ、お父さん。

ちゃんと教えてよ。

いつもみたいに私の質問に答えてよ。

まだまだ、聞きたいこと、教えて欲しい事がいっぱいあるのよ。

言っても仕方ないって、どうしようもないって分かっているけれど・

・
・
・

全身から叫び声があふれ出して止められないの！

『お父さん、どうして死んじゃったのっ!?!?』

『もう諦めるのか？ハルバートの娘だと言うから少しは骨のあるヤ

ツかと思ったのに、大した事ないな』

がぼっ

ごぼごぼと顔に泡がぶつかる。

酸素を求めて必死に水面を目指そうとしたが、その必要は無かった。身体を起こせば簡単に顔は外に出ている。

こんな浅い所で一瞬でも溺れかけた自分が恥ずかしい。

それだけパニックに陥っていたのかもしれない。

全身から匂い立つ焦げくささが、丸焼きにされかけた現実を物語っていた。

(それにしても・・・さっきの声は誰だったのかしら?)

思わず、人の姿を探す。

背後は永遠と続く浅い湖、前方には岸。

ススキ野原は奇麗に姿を消していて人の気配は無い。

(今、この世界に存在するのは私と鬼さんだけの筈なのに・・・)

でも、あれは鬼の少年の声では無かった。

もつと低い大人の男性の声だったし、そもそも実体の無い響きで頭の中に直接聞こえてきたような気がする。

不思議な感じ。

私はその人を知っている気がする。

いや、おそらくこれから・・・

「おいつ、そんな所でもたもたして良いのか？」

今度は現実味のある声。

主を確認すると、岸側の斜め上、空へと続く階段の上の方に鬼のシルエツトが見えた。

しまった！もうあんな所まで逃げている。

「まつ・・・待て〜!!」

勢いよく水を押し返し、重くなった服を足かせに感じながら、階段を上り始める。

どれだけ離れているかは分からないが、少年は余裕をこいてこつちを見下ろしたまま動かない。

油断こそ最大の敵。

ただど相手が油断したらそれは最大のチャンスになる。

そう、これはチャンスだ。

今のうちに追いつこうと、足取りを速める。

疲れきった身体に階段は辛かったけれど、際に咲く紫陽花の花がとても奇麗で少しは気を紛らわしてくれる。

まるで見知っている公園の階段を上っているような気分だ。

(花が青いからこの土はアルカリ性なのね・・・)

なんて、最初こそ心に余裕を感じていたが、いつの間にか景色は色を失い周囲には色の無い空だけしか残っていなかった。

真っ青に晴れているわけでも無ければ、どんよりと曇っているわけでもない空白の空。

変わり映えの無い色と景色は虚無感を産み、心の体力を奪っていく。一歩一歩踏み出す事に意味を見いだせなくなり、今自分が何のため何をしているのかもよく分からなくなる。

重力に逆らう事が、全てに逆らっているのかのように思わせる。

上って

上って

昇っても先が見えない

まるで前に進めない・・・

魂が抜けていく・・・

「はあ、はあ、はあ・・・」

思わず、両手を階段に付いてしまう。

脈打つ全身が悲鳴をあげ、まるで命を削られているような気分だ。

このまま進み続けると死んでしまうような気にさえなる。

(そういえば！お父さんが人は死ねばか宇宙の果てにいくんだって

言っていた。空は宇宙の手前だから・・・もしかしてっ!?)

心臓が縮こまるこの感覚は、変だと思っていた。
酸素が足りないだけではこうはならない。

この階段は死へと直接繋がる道・・・
知らないうちに私は自分の命を削っていたんだ!!!

(いけない、このまま進んだら本当に死んでしまうわ!)

思わず引き返す為に階段を降りようとする。

幸い道が消えているというような事は無く、後戻りは可能だ。

(ちよつと待って!ロダ。今ここを引き返したら勝負はどうなるの?
捕まえなくちゃいけない鬼さんは前にいるのよ。)

下る一步をまた戻すと、階段の上方を確認する。

鬼の少年は相変わらずさつきと同じ距離を保ったまま見下ろしている。

勝負に勝つには引き返すわけにはいかない。

だけど、このまま闇雲に命を削るわけにもいかない。

(お父さん、どうしたら良いの??)

いいかい、ロダ、物事には必ずルールがある。

まずは約束事を知る事なんだ。

人が一人で生きられないように、世界も一つでは成り立たない。
常に事なる2対、またそれ以上によって均衡を保っているんだ。

困った時は、そのバランスを一度崩してごらん。
きっと、答えが見えるよ・・・

2対とはこの場合は鬼さんと私の事。

「鬼さん、私・・・鬼さん・・・私・・・鬼さんと私・・・」

逃げる鬼さん・・・

追いかける私・・・

逃げる鬼さんがいるから追いかける私。

二つは繋がる歯車。

追いかける私がいるから逃げる鬼さんは逃げる。

連鎖を解くためには・・・

・・・どちらかが止まれば良いんだっ!!

「お父さん！解けたわ!!!」

灰かぶりの章／鬼と鬼ごっこ（4）

前にも後ろにも進めないのなら、私はその場に立ち止まる事にした。階段に座り込み、両手で顔を覆う。ひっく・・・としやくってみたり、鼻をすすする音も出してみる。

（ちょっとわざとらしすぎるかしら？）

なんて、反省している間に相手は私の張り巡らした罠にかかってきた。

背後に微かな人の気配を感じる。

それは警戒するように定まらない動きをとっていたが、じわじわと近寄ってきて、しまいには前方に回ってくる。

隙間を作った指の間から、戸惑いを隠し切れていない足が見える。

「なんだ、もう諦めたのか・・・つまんないな。」

至近距離で聞こえる声。

（今だわ！）

私は勢いよく顔を上げてにやりと笑う。

泣いてなんかいませんよ！と自信たっぷり。

鬼の少年は一瞬ひるむが、私がそれを見逃すわけがない。ぱしっとしっかり腕を掴み取った。

「捕まえた！私の勝ちね、鬼さん！！」

少年は反射的に身を引いて、私の手を拒もつとするが、そうはさせ

ない。

狙っていたのだから絶対に離さないという意思を込めて強く握り返すが、予想に反して相手は簡単に抵抗を辞めた。

「ま、いつか。それなりに楽しめたし。」

お面越しにフンツと人を馬鹿にしたように鼻で笑う声が聞こえた。

なんだろう・・・この気分。

勝利者は私なのに、屈辱を感じる。

（あ、そうか・・・）

泥で汚れた顔や服、焦げ付いてジリジリになった髪の毛、全身に刻み込まれた無数の切り傷・・・

おおよそ勝利者とは思えないボロボロになった惨めな私の姿に、少年は笑っているんだ。

まるで、いじめっこのように・・・

大きな勘違いをしていたようだ。

私はこの勝負にどうしても勝ちたかったが、相手は勝ちたくも無ければ負けたくもないとも思っていなかった。

少年にとってはただの遊びで勝ち負けなんてどうでも良い事だったんだ。

「会いたいなら会わせてやるよ。皇帝とやらに。」

脱力し、緩んだ私の拘束を勢いよく振り払うと鬼の少年はその手を空虚な空に向けて振りあげた。

それを合図に、周囲は光を失い暗転する。

物語のシーンが変わったかのように、一瞬にして夜に襲われた。

闇は人の心に恐怖を落とす。

反射的に逃げようと身を引いてしまいが、行き場の無い足元に闇に道など無い事をすぐに思い知る。

カツ!!!

何かのスイッチが入るような音がしたかと思うと、すぐ前にスポットライトが照らし出された。

まるで舞台装置のライトのように、闇の中である一部だけが鮮明に映像として映し出される。

物語の主人公のように、センターポジションで豪華な椅子に座る人影。

(皇帝様かしら?)

確かめようと足を一步踏み出すと、足元で奇妙な感触を覚えた。がしゃつと固い物を踏んだような不快感。

どうやら地面に積み上がった何かの上に立っているようだった。

暗くてよく見えなかったが、所々で鈍く光って見える。

更に眼を凝らして見ると・・・

それは宝石、宝飾の山だった。

ただし、本物では無くて偽物の陳腐なもの。

形もいびつで色も光も曇っている・・・まるでガラクタの山だ。

「僕だ！僕が皇帝だ！」
エンペラー

勝ち誇ったようにガラクタ山の皇座に腰下ろす鬼の少年。

(うづん、あの子は鬼じゃない。あれはただのお面で偽りの姿。)
自作自演の皇座で威張る少年に、同情と切なさがかみ上げてきた。
私に追いかけて回させて、ボロボロにして、勝負に負けても平気そう
で・・・いや、もともと勝負に勝つ喜びも負ける悔しさもきつと知
らないのだ。
私にはお父さんがいたから、いろんな事を教えてもらえた。
たくさん心の感情と気持ちを貰った。
でも、彼には心が無いんだ。
とても哀れだ。

「違う、貴方は皇帝様じゃない。」

はつきりと答えた。
自信があつたからお面の先にあるだろう瞳をしっかりと見据える事
ができる。
少年はそんな私の態度が気に食わないのか、不機嫌に言い返してく
る。

「僕が皇帝だと言っているから皇帝は僕だ！」

「違うわ、だって、まるでここはおもちゃの国のような茶番な世界
だもの。ほら、見て。この宝石もただのレプリカよ、偽物だわ。」
足元のがらくたをすくいあげて見せると、更に少年は怒りをあらわ
にしてきた。
偽物という言葉に反応したようだ。

「皇帝は僕だ！僕が一番だ！」

椅子から立ち上がって息を荒げる。
今にも私に飛びかかってきそうだ。

お父さんが言っていた。

牙をむく動物は本当は弱いから虚勢をはって威嚇するんだって。
だから、そういう相手には同じように牙を出してはいけない、牙の
向こうに見える本当を見抜かなくちゃいけないんだって。

私はお面の裏にあるだろう少年の本当の顔を想像してみる。

「どうしたの？」

それは、とても弱々しくて、苦しそうだった。
天に立っているのではない、地に虐げられている人間の顔だ。

「あなた……何に縛られているの？」

灰かぶりの章々幻のエデン（1）

運命ってすごく曖昧な言葉だと思う。

たくさんさんの書物にいろいろな形で出てくる単語。

辞書で調べても、人間の力を超越した巡りあわせ、なんて書いてある。

「超越した力」なんてあまりにもお粗末な表現の仕方では納得できなかったから、ここはお父さんに聞くしかないと思った。

お父さんはいつだって本当の答えをくれるから……

人間の人生にはたくさん進むべき道があるんだよ。

あるいはそれが分かれ道だったり、一本道だったり、数えきれないほどに枝分かれしていたり……

それを選んで選択する事ができるけれど、それぞれの道の先にある結果はあらかじめ決まっているんだ。

それが、運命だよ。

例えば……

私とロダ。

私はエリシアという妻を選択して選んだ、でもその先にロダがいるのはあらかじめ決まっていたんだ。

だから、私とロダが親子であるのは運命なんだよ。

私が自ら望んで選んだ運命だね。

お父さん。

ロダは今、運命を一つ選ばうとしているのかもしれない。
ううん、もう選んでしまったんだ。

私と彼が今、出会ったのは運命なのだ。

「どうしたの？あなた・・・何に縛られているの？」

威嚇する為に作られた鬼の顔が破綻した。

弱々しく、情けなく崩れ落ち、一気に飛び散る。

景色は又、一変した。

物語は終焉へ。

ここは魔法の森、幻の世界。

全てが抜け落ちた天の色、真っ白な空白の世界にバーラルの塔がそびえ立つ。

混乱と不完全の象徴。

それはまさしく彼を表しており、まだ歩き始めた自分も指しているんだろう。

一つ一つ仮面が禿げていく。

少年の両手首にはどこに繋がっているのかも分からない鎖の腕輪が付けられていた。

それは囚人や奴隷に付けられる手かせだった。

よく見ると足にも同じものが見える。
彼の作った幻の城は消えてしまったのだ。

「大丈夫？」

「やめろっ！！！」

少年には助けが必要だと感じたから、手を差し伸べるが激しく拒絶された。

「僕は皇帝だ！一番偉いんだ！強いんだ！お前なんかいつだって殺せるんだぞ！！」

頭を抱え込んで、ヒステリックに声を荒げる。

その度に重い鎖がジャラジャラと音をたてた。

まるで鎖に繋がれた猛獣のよう、百獣の王ライオンは自由を失えばもはや王では無いのだ。

「かわいそうに・・・ひとりぼっちなのね、誰にも優しくされた事がないのね・・・」

私の言葉に少年はゆっくりと顔をあげた。

眉を寄せて今にも泣きそうな顔をしている。

私はこの時ハツとした。

お父さんにも言われた事があるのだ。

分かった事をすべて口にしてはいけない。

真実が人の心に傷を作る事もあるから、時にはそつと心の中にしまっておく事も大事。

私はきつと今、言っではいけない事を言ってしまったのだ。

「はじめ……」

謝罪しよう少年に近づくと、轟音がそれを遮った。

ガガガガガガガガガガ……

地鳴りのような音が響き、私と少年の間を分かつかのようにならぬ鉄の棒が地面に突き刺さる。

細い鉄の支柱は横一線に並び、二人の間に境界線を作った。

こちら側から見ると、まるで少年が牢屋に閉じ込められているように見える。

いつの間にか、幻はすべて消え、現実の姿だけがあらわになっていた。

(なんて細い腕なの……)

最初にそう思った。

服は袖なんてついていない、ぼろ布同然のもの。

それからのぞかせる腕は骨と皮しか無いんじゃないかと思う。

私の身体だって、ふくよかだとはとても言えないけれど、彼のものはもつとひどかった。

ガリガリの手首に重くのしかかる鉄製の手かせが痛々しい。

仮面を失った素の顔は思ったりずっと弱々しく、頬は痩せこけて、眼の下は大きくくぼんでクマが深く刻み込まれている。

だけど、すべて偽りだったわけではない。

不思議な黄緑色のストレートの髪は彼の本当のものだった。

ボサボサのちりじりで、綺麗な毛並みとは言えないけれど、神秘的なその色は確かに彼自身のものなのだ。

それに、瞳は真つ赤なルビーだ。
着飾る宝石よりずっと美しく、キラキラと本物の色で輝いている。

「貴方は炎の眼なのね。」

「じゃあお前は水になって俺を消すのか……」

少年の声は思ったより低かった。
まるでさつきとは別人のようだ。

「いいえ、水は炎が焼きつくす前に冷ますだけで決して炎の存在を奪うような事はしないわ。だって世界はバランスが大事なんだもの。」

「フン、バランスか……あいつみたいな事を言う。」

水分を失ったカサカサの唇の片方を微かに持ち上げて、少年は皮肉に笑った。

少年の言う「あいつ」が誰なのか私はなんとなく分かっていたけれど、今は知るべき事ではないような気がしたから心に秘めておく事にした。

「大丈夫？閉じ込められているの？早くそこから出なくちゃ！」

掌を立てると鉄格子の間をすり抜ける事ができたから、必死に手を差し伸べる。

少年は差し出す手を見向きもせず背中を丸める。

「ここからは誰も出られない。俺も………お前も………」

「」

灰かぶりの章〜幻のエデン〜(2)

「ロダ、こぼれているわよ。」

すぐ傍で諫める声が響いた。

ハッと目を覚ますと、お皿の上に盛られたイモとマメがぼろぼろと落ちている。

「あつ勿体ない!!」

しまっと思いながら、奇麗なテーブルクロスについたシミを見下ろす。

「どうかしたの？ぼーっとして・・・」

そのシミをふきんで拭きとると、心配そうに私の顔を覗き込んでくる優しそうな女性。

そう、この人は私のお母さん。

髪の毛が長くて、色は私と同じ赤茶色。

私の髪の毛は硬くてざんばらだけど、お母さんの髪は長くても柔らかいから、大人になったら同じようになれるかもしれないって楽しみにしているんだ。

「眼をあげながら寝てたんじゃねえのか？」

「違うわよっ!」

皮肉っぽくそう言ってくるのはお兄ちゃん。

いつも意地悪な事ばかり言って私をいじめてくる。
でも、本当は優しいし、とっても賢いの。お父さんの次にね。

「ロダは器用だなあ」

アハハハハ・・・なんて大口をあけて笑うお父さん。
もう、お父さんったらそんなに笑わなくても良いのに。

「違うもん！」

って口を尖らせて怒ってみる。

もちろん確信犯。

こつやると・・・

(きたっ!!)

肩をすくめて頭の上に降ってくる優しい感覚を受ける。

お父さんのこの大きくて優しい手が好き。

安心するし気持ちいいから、こつやって頭を撫でられるのが大好き。
だから、時々わざとすねたりしてみるのよ。

温かな空気。

和やかな笑い声。

普通の幸せ、当たり前前の幸せな家族。

涙が出そうなくらい、幸せなんだ。

「ねえ、お父さん今日もお勉強を見てね。」

私はイモを突き刺したホークを口にくわえながら言う。

「相変わらず、ロダは勉強熱心だね。」

「当然よ！だって、私は……」

「お父さんのような立派な賢者になるんだもの！！」

ぴったり息の合った二重奏に私は確信犯の方を見る。

「もう、お兄ちゃんっ！！」

「お前はワンパターンすぎるんだよっ、いい加減そのセリフは聞き飽きた。」

「だって、私の夢なんだもの。お父さんの夢は私の夢なんだもの！ね？お父さん？」

私はいつものように優しく微笑んでくれているであろうお父さんの方を振り向いた。

しかし、予想外にお父さんは少し曇った表情をしていた。困っているような、悲しいような……でも口元は穏やかで、複雑な顔。

「……お父さん……?」

私は不安になって呼びかけてみる。

「……ああ、そうだね、ロダの未来が楽しみだね。」

いつもの表情に戻して優しく笑って答えてくれるけど、どこか違和感を感じる。

そんな、心中を察したのか、私を避けるかのようにお父さんは話題をお兄ちゃんにふった。

「ユウリキ、学校はどうだい？」

「余裕だよ、内容が簡単すぎるぐらいさ。」

「そうか、ユウリキは属性学が……………」

二人の会話は私の気持ちを置き去りにしてまるで普通に流れていく。いつも通りに……………そう、これはいつも通りの日常。当たり前なのも通り。なのに……………何か変だわ。

「ん……………」

「ロダ、行儀悪いわよ。食事中に肩肘つかないで。」

「ねえ、お母さん何かがおかしいの。」

「おかしいって何が？」

「何がって言われても分からないんだけど……………」

「おかしい事を言う子ね。」

呆れたようにそう言つとお母さんは食べ終わった食器を積み重ねて台所に帰っていった。

これもいつもの日常、別に変わった所は無い。
次第に、お父さんとお兄ちゃんは私が分からないような難しい話を
しだしている。

こうなると、私はのけものにされているようで悔しいんだ。
よし、間に割って入って行ってやろう。

「ねえ！お父さん、今日は私の勉強を見てくれるんでしょう？お兄
ちゃんとはっかり話してないで早くご飯を済ませて口ダにもいろい
ろ教えてよ！」

腕に手を絡ませてだだをこねる。

甘え上手は妹の特権なのだ。

「はいはい。このスープを食べ終わったらね。」

優しくそう言ってくれるお父さん。

なんだ、いつものお父さんじゃない、やっぱりさっきのは気のせい
だったのね。

「じゃあ、早く食べて！早く〜。」

そうせかすと、お父さんは「はいはい」と答えてくれる。

「お前ちよつとは落ちつけよ。賢さの基本は落ち着きと冷静さだけ。

」

なんてお兄ちゃんが又、皮肉を言うてくるから少し腹がたって言い
返そうとした時だった。

カリカリ……

爪で何かを引っかくような音がした。

「ん？」

変に思つて視線を足元に落とすと、とんと膝の上に重みを感じた。

「あれ？猫だわ。どこから入ってきたのかしら？」

前足を私の膝の上へのせ、まるで人間のように皮肉った細長の瞳が私の方を見ている。

「ナゴオ~~~~」

「かわいい〜おいで！」

酒やけしたおっさんのようなだみ声で鳴くその猫を抱きあげてみる。ずしつとした現実味のある体重が両腕にかかった。

「どこが可愛いんだよ？不細工の間違いだろ？」

「えー、可愛いよ？」

疑問形を残しながら猫の全貌を確かめる。

確かに少し太っているが……いや、わりと太っているが、眼はククリには程遠くて細長で嫌味っぽいが……いや、でもそこがチャーミング……と言える！きつと！

「ナオ~~~~」

そんな私の心の言い訳を知ってか知らずか、猫はやる気無く長鳴きした。

ほっとけと言わんばかりに。

「ロダ、まだ食事中よ、猫なんか抱かないで」

お母さんが横からそう割り込んでくる。

「はあい」

仕方なく腕を緩めて猫を下ろす。

ダンッと小気味よい音を響かせて降りた猫はそのままどこかへ行くわけでもなく、背中を向けたまま顔だけこっちに向けてきた。

何か言いたげな顔。

「お母さん。この猫、私に何か言いたそうよ・・・」

「どうせ、食事のお残りにあずかりたいだけでしょ？餌をあげたら居付いちゃうからやめてよ。」

「うん・・・」

お母さんはこの猫に対して根本的に興味が無いらしい。でも、私はなんだか気になる。

なんでだろう？

なにか・・・

何か、知っているような？

・・・ん？知っている？

灰かぶりの章〜幻のエデン〜(3)

「私、行かなくちゃ！」

そう！ここは幻を見せるマフタの森なのだ。
温かで穏やかな幸せの世界などある筈がない。

「駄目だ、行かせない。」

走りだす私を強い力が引つ張り返してきた。
お父さんだった。

まるで、お父さんとは思えないような冷たい冷めた目。
怖いぐらい低い声。

いや、確かにこの人はお父さんでは無いのだから当たり前なのかも
しれない。

「離して、私は行かなくちゃいけないの！」

手を振り払おうとするが、拘束は解けない。
まるで微動だにしない得体のしれないこの人に私は恐怖さえ感じだ。

「どうして、そんな怯えた眼を向けるんだい？ロダは誰よりもお父
さんを信用してくれていたじゃないか。もう嫌いになったのかい？」

「違う……」

「ロダ、ここに居るんだ。ここでならお父さん、ずっと傍に居てやれ
る。もう、誰かにいじめられる事も無く、苦しみも悲しみも、辛さ

も無い。父さんの夢なんか忘れて家族一緒に幸せに暮らそう。」

「違うのっ!!」

全身を奮い立たせて声を出す。

お父さんと同じ声でそんな事を言わないで。

お父さんと同じ顔でそんな怖い瞳を向けないで。

「私には、お兄ちゃんなんか居ないし、顔も知らないお母さんは私を産んですぐにどこか遠くにいつちゃって知らない人なの……それに……」

グツと唇をかみしめる。

これを言うのは一番辛い。

「大好きなお父さんは死んでしまったのっ!!」

お父さん……

お父さん……

「どんなに願っても、無いものが有るようになったりしない、死人は絶対に生き返らない。それが世界のルールだって……そう教えてくれたのはお父さんだわ!」

お父さん

お父さんっ

お父さんっ!!

「だから、お父さんがそんな事言ったりしない、貴方はお父さんなんかじゃない。」

お父さんは、もういない。
もう・・・

どこにもいないんだ・・・

「ずっと後悔していたんだよ・・・」

頭上から響く声。

優しくて穏やかで・・・まるで本物のお父さんのような声。
堪える為に落としていた視線を、おそろおそろ上げる。

「父さんはロダにたくさん伝えてしまったからね、自分を追ってく
ると思っていた。でもそれはきつとロダにとっては幸せな事では無
い、背負わなくてもいい運命を背負う事になる。」

痛いぐらいの手首の拘束がそつと緩んだ。

何かを諦めたかのように眉を下げると、大きな腕が私の身体を拘束
する。

でも、今度は痛くない。

慈しみを込めて優しくそつと抱きしめられる。

私の大好きな大きな手で。

「これが最後のチャンスの選択だよ。」

覆いかぶさるようにお父さんの声が耳のすぐ傍で聞こえた。

ああ、もう遠い昔のように思える懐かしい香り。

「ここに居るんだ、ロダ。ここでならお前に永遠の楽園^{ヘヴン}を約束してやれる……」

切なくちぎれそうな声。

そうか。

お父さん、私分かったわ。

お父さんは心配してくれているのね。

だから魂が逝けずに残って、私に幻を見せてくれているのね。

でも、もう運命の選択は済ませちゃったの。

だから……

「お父さん、安心してね。」

まるで冷めているお父さんの胸板をトンっつと両手で優しく押し返す。

冷たい温度は死人の証。

「ロダはちゃんと生きるよ。どんなに苦しくて、辛くても……」

生きて

生きて

生き続けて

「お父さんのような、立派な賢者になる。何度躓いても、何度迷っても、丸い世界のように最後はお父さんの夢に戻ってくる。いつだってロダはお父さんの夢に生きていくわ！」

だから、安心してね……と、もう一度心で呟く。

私、今ちゃんと力強く笑えているかしら？

「そうか……」

諦めたような……でも少し残念そうに崩すお父さんの表情。まるでそれに同調するかのように、幻の世界も一気に崩れる。

マフタの森が作りだした魔法は今、解けたのだ。

おそらくこれはお父さんが作りだした幻覚の魔法、私の為に作ってくれた試練だった。

(行かなくちゃ……)

私はお父さんの出した最後の問題を解いて、試練を超えたのだ。出口は探さずとも、目の前にある筈。

「この幻の世界もじきに消える……」

白く色を失ったお父さん。

お父さんの最後の想いも一緒に消えちゃうのね。

「うん……私も、もう行かなきゃ……」

そう言うのとは裏腹に、いまいち声に元気がでない。

私の未練を感じ取ったお父さんは少し首をかかけて顔を覗き込んでくる。

「ロダ、お父さんは感心しているんだよ。よく頑張ったね。現実を受け入れるのは辛かったろうに、偉いよ。」

ふわっと頭に当たる優しい感触。

「・・・・・・・・・・・・・・・・うつ・・」

涙ってポロポロとこんなにも、とりとめ無く溢れてくるのね。
止まらないのね。

お父さん、ロダはお父さんが死んでから初めて涙が出たよ。

「お父さん・・・・・・・・お父さん・・・・・・・・お父さんっ！」

何度そう呼んでも、世界がポロポロと禿げていくのは止められない。
もう時間は無いようだ。

「お父さん、ロダは行くね・・・・・・・・さようならっ！！！」

今度はきつと思い通りに笑えている筈。

それが正解だよ・・・・・・・・と言わんばかりに深くゆっくりと頷くと、
しゃくしゃくと私の頭をかきまわすお父さん。本当に満足そうだ。

「頑張ったロダにご褒美だ。最後に少しだけ、父さんの記憶を見せ
てあげるよ・・・・・・・・」

何処か遠くに聞こえるお父さんの声。

溶ける視界に消えていく優しい笑顔を見送ると、遠い彼方へ意識が
飛んでいく。

「ユウリキ皇子、私には娘がいるんです。歳は皇子より少し下でね・
・・」

「それがどうした？」

「自分で言うのもなんなのですが、なかなか聡明な子で将来が楽し
みなんですよ。」

「フン、ただの親バカ自慢か、退屈だ、やめろ。」

「そう言わず少しだけお付き合いください。皇子にはロダの兄にな
ってやって欲しいんです。」

「なんだと？」

「あの子には兄弟がないんですよ。もともと賢すぎる子ですから、
同世代の子とも関わろうとせず私とばかりいるのが前から気になっ
ていたんです。皇子とならきつと上手くやっていきます。」

「それで、なんで兄弟なんだよ、兄弟は血の繋がりでなるものだ。
勝手決めてなれるもんじゃねえし。お前賢者なんかやってるのに本
当は馬鹿なんじゃねえのか？」

「いいえ、他人の兄弟は誰とでもなれるんですよ。遠い異国の文献

にも残っています。『義兄弟の契は永遠の証、死を分かつまで……』と。血の繋がる家族は確かに血の縁で深く結ばれているかもしれませんが、けれど心が離れると意外と簡単に縁も切れてしまったり、憎しみあつたりしてしまうものなのです。しかし、心で絆を結ぶ他人は決して血の繋がり縁におとつたりしないんですよ。どんな時も共にあるうと願えば兄弟であり続けられるんです。」

「又、お前の自論哲学か……。いい加減それを証明してみろよ。口ばかりでは誰も信用しない。ひとまず俺をここから出してみろ、でないとお前の娘とやらも会えない。」

「申し訳ありません、皇子。もうしばらくは……。」

(ああ、そうか。)

すべては繋がっていたんだ。

運命はやっぱり決まっていたんだね。

お父さん、ロダは彼の元へ行くよ。

ちゃんと一緒に行くよ。

お父さんが作ってくれたこの道をしっかりと歩んでいこう。

灰かぶりの章〜幻のエデン〜(4)

紙が焼け落ちるかのように壁は焦げ落ち、地割れが足元を奪っていく。

でも、私はこの世界と一緒に灰になるわけにはいかない。早くここから出なくてはいけない。

(道は何処にも無い。どっちへ行けば良いの?)

白い指標が見えた気がした。

それはきつとお父さんの一本の指で、示す方向を視線で追うと……

「ナオ〜」

椿山に腰を下ろす猫。

そこだけが真っ赤な台地になっている。

「ネコっ!?!」

救世主だ。

猫は私をここに連れてきた張本人。

入口を知っているのなら出口だって知っている筈だ。

次々と崩れ落ちる地面を避けながら必死に猫の元へと駆け寄る。

まるで「早くしろ」と言わんばかりに猫は何度もこっちを振り返る。らしくなく、じれてるようだ。

「待って!ネコ!もう一人いるの。あの子も一緒に連れて行かなく

「ちや。」

とは言っても一面は何もない闇。

壁と一緒に足場もどどん狭まり、身動きがほとんどできない。

（でも、置いてはいけない。絶対一緒に行くんだから。あ子は・・・ユウリキは私のお兄ちゃんに・・・義兄弟になってくれる人なんだもの。）

拳を腹のあたりで握りしめ、胃を締める。

今考えられる最善の事を思案する。

相変わらず猫は、何度も前を向いたりこっちを振り向いたりしている。

「分かっているわよネコ、時間は無いのよね。」

名前はその人の魂そのものなんだよ。

例え見えなくても、例えどんなに遠く離れていても
呼び続けければ必ず届く。

(ああ！だからお父さんは彼の名前を覚えてくれたのね。)

腹の底に息を吸い込む。

チャンスは一度、この声が彼に届かなければそれで済みだ。

「ユウリキっ！！！！！！」

短くしかし何処までも届くように、凝縮した鋭い声で叫び声をあげる。

音無く崩れる世界は静寂のままだけど、不思議と不安は無かった。後は私が見逃さなければ良いのだ。

耳を澄ます。

ちよっとのきっかも逃さない・・・

(・・・鎖の音っ！！)

「ユウリキこっちよ。」

安著の声でそう言うと、まるで最初からそこにいたかのように、目の前に彼は立っていた。

驚いたかのような大きな赤い瞳を私の茶色の瞳に映して。

「一緒に行きましょう、ここから出るのよ。」

骸骨のように骨ばった彼の手を握ろうとする。

しかし、二人の間には徹底的な壁があった。
幻はすべて闇に消えても、彼の手足を縛る枷かせと閉じ込める鉄格子は消えない。

「無理だ、俺はそつちには行けない。」

まるでその理由を示すかのように、手にはめられた拘束の鉄を握りしめる。

真っ赤なルビーが一瞬力無く光った気がした。

「駄目よ、死ぬなんてだめよ・・・」

不安になった。

彼は生きるのを諦めている気がしたから。

「死ぬのは絶対にだめだよ!!!」

鉄格子を両手で掴むと、揺らして訴える。

死んだ人はもう二度と生き返らないけれど、生きている人間は死ぬまで生きぬかなくてはいけないのだ。

「お前、必死だな、やっぱりバカだな。」

自嘲気味に笑いを捨てる。

嘘つきに笑うその姿が、今までで一番彼の真実を表している気がした。

「べつに、死にはしない、ただの現実に戻るだけだ。」

「その現実には辛い所？」

「そうだな。」

「私のせい？私がエデンを放棄しなかったら、ずっと一緒に夢の世界で生き続ける事ができた？」

「フン、馬鹿にするな。偽りの幻の世界なんてまっぴらごめんだ。俺は騙すのは好きだが騙されるのは大嫌いなんだ。どうせなら世界でも大々的に騙して気分よくなりたいたいものだ。」

「世界を騙すの？」

「ああ、される側になんてならない、する側になってやる。」

「じゃあ、その時隣にいるのは賢者になった私ね。」

まるで当たり前に思った事を言っただけなのに、ユウリキはさぞ驚いた顔をした。

けれど、すぐに心当たりを見つけたようだった。

「おまえ……………」

確かめるように私の瞳の先を探る。

それ以上何も言わなかったけど答えはお互いの中で出ていた。

「もう、安心ね。離れていても私達は同じ所に辿りつく事ができるもの。」

現実の彼を閉じ込める檻は嚴重で、今はこれを破る事はできないけれど…………

「私の名前はロダって言うのよ。ロダ！覚えて？ロダよ。」

ユウリキの背後から押し迫る光の消滅。

きつと彼もそこに消えていく。

でも私はその光に触れると死んでしまうからここから逃げなくては
いけない。

「今はそっちへ行けないけれど、苦しい時、辛い時は空に向かって
私の名前を呼んで・・・」

名残惜しく鉄格子を掴んだ手をすりりと離すと、早くしろとせかし
ながら振り返るネコに向かって踵をかえす。

「私、その声にこたえる。」

もう身体は走りだす。

「必ず応えるわっ！！」

白い霧に包まれるようにして、光に溶け込んだユウリキが優しく笑
った気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8578x/>

L O D A

2011年12月10日01時03分発行